

News Letter No. 34

20年3月31日(月) 発信

# Sato Project

*Sato Project*

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—  
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室(加藤) e-mail: [sato@chikyu.ac.jp](mailto:sato@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



北野天満宮の梅

<http://www.picmate.jp/112931869/albums/8937/photos/468328/>

## 早春のケンブリッジ便り

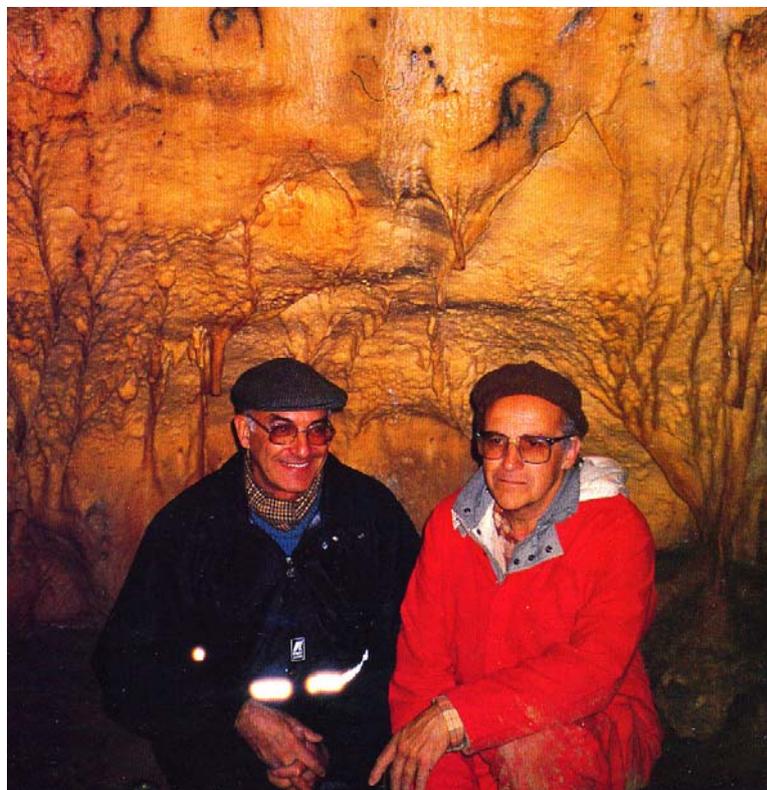
渡辺 千香子 (大阪学院大学 国際学部)

## 早春のケンブリッジ便り

渡辺 千香子（大阪学院大学 国際学部）

1月末、短大後期の授業を終えるや否や、研究調査のために渡英しました。この時期のケンブリッジは、スノードロップと呼ばれる白い可憐な花が咲き始めており、厳しい寒さの中に真っ先に春の訪れを告げる花の姿が目にも染みるようです。スノードロップにやや遅れて、黄色や紫のクロッカスがいつせいに開花します。また夜間に高い声でさえざるナイチンゲールを耳にすることもあります。この時期は、長かった冬に終わりが来ていることを感じさせられ、ケンブリッジに留学していた間も一年でもっとも好きな季節でした。2-3月の春休み期間は、ちょうどケンブリッジ大学のレント・タームと呼ばれる学期中で、通常の講義のほか、連日いくつもの講演があちこちで重なって催されます。冬休みや夏休み中にケンブリッジを訪れても、学生たちもホリデーで街を離れており、本格的な学術活動に触れる機会はほとんどありませんが、こちらの学期中には各分野の学者が世界中から招かれて集まり、素晴らしい講演を聞く機会に恵まれます。

今学期は、アフリカの「サン」と呼ばれるブッシュマンの研究から、先史時代の洞窟壁画の解釈に新天地を拓いたルイス・ウィリアムズ教授が、セント・ジョンズコレッジの客員フェローとしてケンブリッジに滞在されています。私はルイス・ウィリアムズ教授が登場する BBC のドキュメンタリー



洞窟壁画の調査をするルイス・ウィリアム教授（右）

「How Art made the World」を見て以来、洞窟壁画に描かれたモチーフが、現実のものではなく、精神的な世界を描いたものだという解釈に深い感銘を受け、じかに話を聞くのを楽しみにしていました。日頃から、私は美術史の分野で「常識」としてまかり通ってきてしまった解釈、すなわち「未開人」の描いた絵だから、「こんなに大きな動物が狩猟の獲物になったらいいな」という程度の願望を描いたものだろう、という現代人の短絡的な考え方に反発を抱いていました。ルイス・ウィリアムズ教授の研究に触れたとき、その研究の精緻さ、素晴らしさに加えて、まさに私が待ち望んでいたような古代の芸術の解釈であることに、心から感動しました。

概して、美術史研究者が「未開人」というとき、そこには当然「古代人」も含まれています。古代メソポタミアやエジプトの優れた芸術を前にしても、「古代」だから「未開」という偏見の眼鏡を通してしか対象を見ようとしない傲慢な態度に、私は幾度となく腹を立ててきました。ちなみに私の専門はメソポタミア美術史です。確かに西洋ルネサンスで確立された「透視図法」のような遠近法は古代芸術には使われていませんが、だからといって空間の描き方が稚拙だとか、人物表現が様式的だと決め付けて、ギリシャ以前の芸術を「未開」の一文字でくくってしまうことが正しいわけではありません。でも無意識にこうした偏見を抱いた美術史研究者が、残念ながら未だに多いのが実情です。

ルイス・ウィリアムズ教授は、アフリカのサン族が残したロックアートを研究するうち、そこに現実の場面とは矛盾する表現を見出しました。たとえば、写実的な表現で描かれたエランド（アフリカ産の大型の羚羊）を例に挙げると、見事な動物表現であると同時に、その後脚が不自然にクロスしていることに気づきます。エランドが脚をクロスさせるのは、まさに死に瀕した状態にあることを示すといえます。背後でこのエランドの尻尾をつかんでいる人物像に注目すると、この男の脚も同じようにクロスしています。従来解釈では、このような動物と人間が描かれた場面は、一様に現実の世界の「狩猟場面」を描いたものとされてきました。しかし、細部を子細に観察すると、「狩猟」とは言いきれない表現が多く見出されたのです。そしてルイス・ウィリアムズ教授は、サン族がまだ南アフリカの地から追われる前に、南アに赴任していた宣教師が書き残したサン族の神話や信仰についての膨大な記録を古文書館で丹念にたどり、そこから壁画に描かれている場面が、サン族の信仰を物語る豊かな精神世界であることを実証したのです。ルイス・ウィリアムズ教授の数ある著書の中の一

冊『The Mind in the cave: Consciousness and the Origins of Art』(2002, Thames and Hudson) は、欧米ではベストセラーとなり、その後、トルコで発見された新石器時代に先立つ遺跡ギョベクリ・テペを扱った『Inside the Neolithic Mind: Consciousness, Cosmos and the realm of the Gods』(2005, Thames and Hudson) も大きな反響を呼んでいます。後者にも、見事な動物が浮彫りで表現されています。



アフリカのブッシュマン(サン族)のロックアート

(後脚を交差させたエランドと、同じく脚を交差させた人物像)

ともあれ、地球研の佐藤プロジェクトの「環境思想セミナー」に、一度ルイス・ウィリアムズ教授をお呼びしようという話があったため、事前にメールでコンタクトをとり、2月初旬のある朝、お目にかかることができました。待ち合わせた場所に行くと、扉の前に立ってあちこち見回し、私を探している様子。実は前日にお会いするはずだったのに、うっかり忘れられてしまい、そのことを本当に悪がって詫びられました。こんなところからも、誠実なお人柄が偲ばれました。お会いしてすぐ、私は何よりも彼の話される英語の洗練された表現

に感銘を受けました。英国で教育を受けられたのかと思って尋ねてみたところ、ずっと南アフリカで教育を受けたということでした。しかしご自分のお弟子さんたちには留学を勧められているらしく、同氏の後を継いで南アのロックアート研究所の所長に就任したベンジャミン・スミス博士は、ケンブリッジ大学で学位をとったということでした。

さて、「環境思想セミナー」でご講演いただくために来日の都合を尋ねると、悲しそうな表情をされ、一年前に脊椎の大きな手術を受けられたばかりで、主治医は今回の渡英さえも勧めなかったとのこと、4月に帰国してすぐレントゲンを撮り、検査を受けるまで、先の予定が立てられないということでした。このことをとても残念そうに話され、今後も密に連絡を取り合いましょう、と約束してくれました。ひとしきりお互いの研究の話をしたあとで、3-4年前に自動車の運転中にいきなり「トランス状態」に陥り、目の前に立派な角をもった「鹿男」が現れた幻覚を見たという私のウィーンの友人のエピソードを話すと、感慨深そうに「How extraordinary!」とつぶやきながら、「その友人と一緒にフランスの洞窟を訪れなさい。ここ（英国）からだったら、すぐ近くじゃありませんか」と言われました。そして、やおら私のノートをとって「ペシュメールに行くといい。それからクーニャックもいい。」と話しながら、les Eyziesにある洞窟の名前や、Foix, Niaux, Parc Prehistorireなどを次々と書き出してくれました。

こうしてルイス・ウィリアムズ教授から「宿題」をもらった私は、さっそくウィーンの友人にメールで報告し、事情を話すと、いたく感激した様子。すっかり行く気になっています。どうやらこの夏は、フランスの洞窟絵画をたずねる旅に出ることになりそうです。